

土橋家文書に記された杭全神社の祭礼行列

黒田 一 充

一、杭全神社の縁起

大阪市平野区・杭全神社の夏祭りは、氏子の町内から九台のだんじりが出て町内を巡る。二日目の夜の合同曳行と、宵宮の夜に一台ずつ宮入りをする勇壮な様子を見るために、たくさんの見物の人びとが集まってくる。

現在はだんじりの方が注目されるため、そちらが主な行事のように見えるが、本来は神輿の渡御が夏祭りの中心である。現在の神輿の渡御行列は、それほど大勢の人数ではないのであまり目立たないが、かつては大人数で行列が構成されていた。

この祭礼行列については、これまであまり詳しく紹介されたことはないが、このたび平野の土橋家文書を調査する機会を得た際、神輿の渡御行列の構成を記した近世文書が残っているのを見付けた。これまで翻刻された様子はないが、江戸時代の行列の様子を伝える史料であり、ここで紹介したい。

杭全神社に伝わる享保三年（一七一三）成立の『平野郷社縁起』によると、平野の地は、平安時代初期の征夷大將軍・坂上田村麻呂の子、広野麻呂の所領であった。ある日牛頭天王が現れ、広野麻呂の子孫に対して自らを地主神と名乗り、この郷に祭れば国家安穩・人民尽樂を守るだろうという託宣を告げた。そのため、坂上氏は貞觀年間（八五九―七七）に牛頭天王を勧請し、当社を造立したという。その後、坂上氏庶流の七家の長が神社を掌り、神宮寺六坊が建立されて毎日朝暮の読経や毎年六月、九月の祭りをつとめた。

平野郷の野堂町に薬師堂があり、全興寺と名付けられた。聖德太子の草創と伝えられ、坂上田村麻呂が病氣平癒を祈って靈驗があった。牛頭天王の本地は薬師如来であることから、全興寺は当社の奥院といわれるようになったという。

その後、建久元年（一一九二）に熊野三所権現が勧請され、元亨元年（一三三二）には後醍醐天皇の詔勅によって証誠殿が再興されたという。さらに、当社から東へ五、六町離れた鹿内という場所にあつて荒廢していた修樂寺が応永三年（一三九六）に境内に遷つて再興され、以降は神

宮寺六坊と修樂寺六坊の十二坊が当社の年中の儀式を嚴重につとめるようになったと伝えられている。^②

寛政八年（一七九六）に刊行された『撰津名所図会』（巻一）では、熊野権現・牛頭天王両社と記され、その境内を描いた付図には、三殿の建物とともに、多宝塔があるなど、神仏習合の様子を伝えている。明治の初めに神仏分離がおこなわれ、明治三年（一八七〇）に杭全神社と改称された。^③

江戸時代の平野庄（平野郷町）は、中世末に築かれた環濠によって囲まれた七町（市町・野堂町・流町・脊戸口町・泥堂町・西脇町・馬場町）で構成される本郷と、本郷の北西から西の方向に位置する今林村・新在家村・今在家村・中野村の散郷とよばれる四村から構成される。この十一町村が杭全神社の近世の氏子区域になっていた。

平野郷町全体の役人としては、年寄・庄屋・惣代・使役・傍使役・籠守役・水守役があり、そのほかに本郷の七町には町年寄と町代と下役人、散郷の四村には村年寄と下役人がいて、町村の運営にあたっていた。^④

『平野郷社縁起』に「坂上氏庶流の七家の長」とあるのは、末吉・土橋・辻葩・成安・西村・三上・井上の各氏で、この七つの家は坂上七名家とよばれている。代々年寄を務め、杭全神社の祭祀にも関わっていた。一方、本家の坂上氏の子孫は、江戸時代の平野庄の運営には関与せず、西脇町の長宝寺に居住して権威を保った。

七名家の中には、現在は平野から離れた家もあるが、坂上田村麻呂の命日の五月二十三日には、各家の当主が杭全神社に集まって田村祭がとりおこなわれている。

この七名家の中の土橋家に伝わった古文書類の大部分は、現在大阪大学文学部日本史教室の所蔵となっており、残りの一部を関西大学古文書室が所蔵している。土橋家文書には、平野の郷学の含翠堂関連の文書が多数含まれており、『平野含翠堂史料』^⑤（清文堂出版、一九七三年）として刊行されているが、それ以外の文書には翻刻されていないものも多い。^⑥ その中の文書を使って江戸時代の祭祀の様子を見ていくことにしたいが、その前に現在の祭りの様子から紹介したい。

二、平野郷の夏祭り

現在の杭全神社の夏祭りは、七月十一日から十四日の日程でおこなわれる。十一日は神輿川行神事で、太鼓台（子どもが乗る布団太鼓）が早朝から神社を出発して氏子の町内をまわる。太鼓台は、だんじりの宮入り一番をつとめる当番町が、担ぐことになっている。神社では、神輿庫から神輿が出されて拝殿の裏に安置され、午後から宮入りの二番町の氏子たちに担がれて、神社を出発する。このときは屋根の上の鳳凰などの飾りつけはされていない裸神輿の状態である。

神輿は、神社の南東にある平野川に架かる樋之尻橋の西詰めにある御祓い所に向かう。ここには石壇があり、その上に神輿を安置する。現在平野川は堤防のため川面まで下りることはできないが、かつてはこの辺りまで河原だったので、川の水を汲んで神輿の足を洗ったことから、足洗いの神事とよばれている。ここで御祓いを受けた神輿は神社へ戻って飾りつけをし、太鼓台も夜に神社へ戻ってくる。その後、神社の大門が閉じら

れ、灯りが消された闇の中、神輿に第一本殿の祭神の御神霊が遷される。

十二日と十三日は、各町内でだんじりの曳行がある。平野本郷の七つの町のうち、野堂町だけが北・南・東の三組に分かれているため、全部で九町（地区）から出される。

十二日の夜には一斉に提灯を灯して九町合同の曳行があり、十三日の宵宮の夜には順番に宮入りをおこなう。だんじりを大きく上下に揺らしたり、激しく回転させたりするのが見せ場で、それを目当てに大勢の見物人が集まる。宮入りは夜遅くまでかかり、九台全部が神社に入ったのち、十四日未明にそれぞれの町内へ帰っていく。

十四日の本宮は、神輿の渡御がおこなわれる。神輿渡御を知らせる太鼓台が、氏子地区をまわり、午後に神輿が発する。昔は大鳥居の前に御旅所があったようだが、国道二十五号線の拡張のため、平野公園内にある三十歩神社（赤留比賣命神社）^{あかるひめのみこと}を御旅所になっている。

神輿の供をする行列は、宮司・神職や巫女、金棒二本・人力車に乗った猿田彦・提灯二灯・神饌を入れた唐櫃・提灯二灯・各町の氏子総代の順に続く。

人力車に乗った猿田彦は、手にした羽団扇で道路の両側で待ち受ける人びとの頭を撫でていく。撫でてもらった子どもは丈夫に育つといわれているが、子どもだけではなく、大人たちも撫でてもらっている。

御旅所祭を終えて三十歩神社を出発した神輿は、全興寺と長宝寺に立ち寄る。門前に神輿を駐め、門内からそれぞれの寺院の住職が供物を捧げ、宮司の祝詞奏上や住職の読経、巫女の神楽が奉納される。

『平野郷社縁起』に記されていたように、全興寺は杭全神社の奥院だと

されていた。長宝寺の方は、坂上田村麻呂がこの寺を創建してその娘が開基となったと伝えられる。坂上氏の邸がこの地にあったことから、神輿が来ると坂上氏の当主が神酒を供えて拝礼したという。

その後、神輿は長宝寺で休み、猿田彦と氏子総代の一行は大念仏寺に寄つて、先に神社へ戻る。夜になって太鼓台が神社へ戻り、その後に神輿が還幸すると、灯りが消されて祭神の御神霊が本殿に戻される「写真1-3」。

昭和六年（一九三一）刊行の『平野郷町誌』には、昭和初期の祭礼行列の様子が記されている。騎上の猿田彦を先頭に、毛槍十本・弓二張・楯二枚・鉾二本・大刀・商大刀各二振・小旗二旒・金棒二本・大鉾二本・隨身・翳^{さや}などの後に神輿が続いたという。今と比べてもっと盛大な行列であったことがうかがえる。その前の、江戸時代の行列の様子を見ていきたい。

三、延享五年の「祭礼行列帳写」

土橋家文書には、祭礼関係の史料として、杭全神社関係と住吉大社の夏祭り、荒和大祓神事に七名家から稚児を出したため、この両社の神事に関わる文書が残っている。その中の、N 69「祭礼行列帳写」（延享五年・一七四八）を紹介したい。

この資料は横帳だが、他の文書のように横長にして縦書きで文章を記入するのではなく、縦長にして行列の神事役を、先頭から順番に紙の表裏に書き継いでいる。最初は杭全神社の祭礼行列が三十二丁に記され、

その後に十丁分の白紙が挟まれ、最後に六月晦日の住吉社の荒和大祓神事で、住吉から堺へ神輿が渡御するのに供奉する出仕行列が、六丁に記されている。これらに表裏の表紙分を入れて、全部で五十丁になっている。「一二ページ以降に翻刻」。

この文書の前半には、六月六日の樋尻への神輿洗の行列、同日夜の御旅所への神輿の出御行列、十四日の郷内の神輿渡御行列の神事役が記され、その後には、各町村が祭礼行列で割り当てられた神事役とその手伝いをする人足への雇い賃として支払う見世札の枚数をまとめている。

行列順を記したところでは、それぞれの神事役はこの町村が担当するのを併記しているが、その担当町村が変更されると、貼紙をして書きかえている。中には役がなくなつたため、新しい紙を全面に糊付けしているところもあり、かなり長い期間この文書が使われたことがうかがえる。

その間に行列の構成にも変化があつたようである。杭全神社の境内には神宮寺の六坊があつたが、衰退したためか、この時期には五坊の杜僧が行列に参加していた。しかし、中之坊の上には貼紙がされているので、やがて行列には参加しなくなつたようである。同じように、十四日の行列に出た宰領という役にも紙が貼られている。

主な行列の神事役を抜き出してみたい。

六月六日 樋尻へ神輿洗の行列

神輿太鼓——八角豎棒——町代（七人）——大祢宜——小祢宜——神輿——使役——御屋敷御同心

同六日 御旅所への神輿出御の行列

神輿太鼓——音楽行列——杜僧（池之坊・「中之坊」・大門坊・南之坊・東之坊）——御櫛 大祢宜——御幣 小祢宜——惣市——惣願——三神子——御供唐櫃——神馬児——御神宝（御旗・御楯・御鉾・御大鉾・御弓・御太刀・大御太刀・御白杖）——御翳——音楽——松明——御組——躍子——御神輿——惣代——七町年寄——惣年寄中——惣代仮役

六月六日は、樋尻へ神輿の足洗いに出かけたのち、現在と違って御旅所への神輿の渡御がおこなわれていたようである。松明の役が出ていることから、夜に入つての行列であることがわかる。

神輿太鼓（太鼓台）が出発したのち、神輿の渡御行列が進む。その道中には、音楽の演奏があり、神宮寺の杜僧たちが続く。櫛と御幣を祢宜が持ち、巫女たち、神饌を運ぶ唐櫃、神馬に乗った稚児、御神宝類のあと、躍子に先導されて神輿が運ばれ、その後を平野郷の惣代や七町の年寄、惣年寄・惣代仮役など平野郷の役人たちが続く。金棒や琴柱は、警護の衆を表している^⑨。

宝暦十三年（一七六三）の「摂州平野大絵図」には、杭全神社は氏神と記述され、大鳥居の南側の「社内入門口」と記された門の南東に「氏神御旅所」と記された四角い区画が描かれている^⑩。神輿行列が郷内を巡つたのち、ここへ神輿が安置されたのであろう。

この日の行列は、平野郷町全体の役人と本郷七町の町年寄が参列しているだけで、散郷四村の村年寄は参加していないが、十四日の郷内の渡

御行列には参加しており、盛大な行列となっている。

同十四日 郷内の神輿渡御行列

鼻高馬（猿田彦）——神楽太鼓——総屋中挑燈——長柄——使役——
社僧（池之坊・「中之坊」・大門坊・南之坊・東之坊）——御柵・大
祢宜——御幣・小祢宜——惣市——惣領——三神子——御供唐櫃——
御駒形神人——御神宝（御旗・御楯・御鉾・御大鉾・御弓・御太刀・
大御太刀・御白杖）——神馬——御翳——松明——音楽——散銭箱持
——散銭箆籠——「宰領」——躍子——御翳——松明——水守加役
——御役所御組——御神輿——惣代——各町村の役人（今林村・新在
家村・今在家村・中野村・馬場町・泥堂町・西脇町・脊戸口町・市
町・流町・野堂町）——傍使——神職惣年寄——惣代仮役——見豫惣
年寄——惣代仮役

馬に乗った猿田彦を先頭に、神楽太鼓、総屋仲間の提灯行列のほか、
使役・水守・傍使など六日の行列には参加しなかった平野郷の役人たち
も加わっている。

四、「平野郷牛頭天王祭礼図」に描かれた祭礼行列

「祭礼行列帳写」は、文字で記されているだけのため、盛大な行列とい
っても想像しにくいところがあるが、幸いに、杭全神社には祭礼行列を
描いた絵巻が残っている。「平野郷牛頭天王祭礼図」（以下、「祭礼図」と

略す）と記された上下二巻の巻物で、奥書によると、花守役の榎坂市右
衛門という人物が、往古の列書をもとにして、嘉永六年（一八五三）冬
に画工に描かせたものだという。

そして、各巻の巻頭の「牛頭天王祭礼図」の文字は、京都の南画家上
田丹崖（一八六三～一九三六）の書で、甲戌年（昭和九年・一九三四）
に揮毫したようである。

内容は、上巻が猿田彦と先頭に、神輿太鼓（太鼓台）から賽銭箱と祠
掌まで、下巻は使役から各町村の役人までの行列が描かれている。絵に
付された詞書を手掛かりに、行列の神事役を抜き出してみたい。

上巻

猿田彦明神——神輿太鼓——綿屋中挑燈——総屋仲間挑燈——柄毛
槍——楽僧——楽方——宮寺中僧——別当東之坊——祢宜——神子
——御供唐櫃——兄（馬上 牛頭ヲ持）——御神宝（随人・御旗・御
楯・御鉾・大御鉾・御弓・御太刀・大御太刀・御白杖）——御神馬
——御差羽——松明——白張——神子——賽銭箱——祠掌

下巻

使役——御地頭御組——神輿——惣代——今林村年寄・新在家村年
寄・今在家村年寄・中野村年寄・馬場町年寄・泥堂町年寄・西脇町
年寄・脊戸村年寄・市町年寄・流町年寄・野堂町年寄——惣会所列
之——傍使役——神職惣年寄——突棒——惣代仮役——見豫惣年寄
——惣代仮役——御地頭・地方御役人

この行列の構成と「祭礼行列帳写」の行列を比較すると、詞書の表現が異なるところはあるが、ほぼ一致している。異なるのは、「綿屋中挑燈」が加わっているぐらいである。おそらく参考にしたという列書の中には、延享五年よりも少し後年になって記された「祭礼行列帳」があったのではないかと考えられる。

「祭礼図」の平野郷の役人や各町村の役人たちが掲げる提灯にはそれぞれ家紋が描かれており、「祭礼行列帳写」の記述からも、神事役の人数は少し省略されているが、「祭礼図」はかなり正確に描かれていることがわかる。

ただし、祭礼図が描かれた嘉永六年ごろの祭礼行列が、この絵の通りかどうかはわからない。この行列の中で最も特色があり、重要な神事役の存在が、すでに忘れ去られていたように思えるからである。

五、駒形の稚児

この杭全神社の「祭礼図」の中で特筆すべき存在は、上巻に描かれた馬に乗った稚児である（二四ページに拡大）。頭に冠をかぶり、胸のところに馬の首をかたどったものを掛けている。ところが、絵は明らかに馬の頭であるにもかかわらず、その絵の横には、「牛頭」と付記されている。祭神が牛頭天王であるためそう記されたのだろうが、おそらくこの絵が描かれた時点には行列には出なくなっており、昔の絵画などをもとにしたために、このような混乱が生じたのだろう。

それに対し、「祭礼行列帳写」には「御駒形神人」と記されている。前

後を添人や隨身などで固めていることから、祭礼行列の中で重要な存在であることがわかる。

元禄十五年（一七〇二）に編集された『神道名目類聚抄』（巻三）の「駒形」の項目には、次のような記述がある。

駒形コマガタ

駒形とて、馬の頭を造、胸に掛け、或は馬の首尾を作りて腰間ヨウカンに著、馬に乗たるごとくにして祭禮に従ふもの、是を駒形の神人ジニンと云ふ。山州石清水八幡宮、又祇園の社などにあり。其意旨をしらす。蓋し祭禮のつけもの、風流の類ならんか。牛頭ゴゾ天皇（マコ）の儀につきて、此義ありと云ものは臆見オウケンにしてあやまりならん^⑩。

この文章とともに、馬の頭を胸のところに掛けている稚児と、胴体の前後に馬の頭と尻のつくりものを着た稚児の絵が付いている。前者が祇園社で、後者が石清水八幡宮の駒形神人である。この書の著者は匿名の人物で、駒形の意味はわからないが、風流の類ではないかと推定し、牛頭天王と関係する説については想像にすぎないと否定している。

京都の祇園祭では、七月十七日の前祭と二十四日の後祭での山鉾巡行後に、本社から四条旅所への神輿の神幸と、帰りの還幸がおこなわれる。三基の神輿を中心とする行列だが、中御前の神輿の前を馬に乗った稚児が進み、胸に木造の馬頭を掛けている。

京都市南区久世上久世町から出るため、上久世駒形稚児（久世駒形稚児）とよばれている。普段は同地区にある綾戸國中神社に馬頭は祀られており、この日は地区から選ばれた子どもが八坂神社に社参する「写真4」。その際は、馬に乗ったまま南門から社前に進み、舞殿の周囲を三周

した後、馬から担がれて拝殿に運ばれ、神事の後、神輿を先導して御旅所に向かう。還幸祭も御旅所から本社へ神輿を先導する。現在は前祭と後祭は別の子どもが担当するが、昔は同じ子どもがづとめていた。

江戸時代後期の随筆『東陽子』(巻四)には、「神祭の節、山城の久世村より馬頭の木偶もぎうを持来る也。天より降りし物にて祭礼第一の神宝といへり」^⑫とあり、この稚児がやってこない、と、神輿が発できないといわれる存在である。

現在は上久世から出される駒形稚児だが、史料からは江戸時代の初めまでしかさかのぼることができない。それ以前は、上久世ではなく、少将井の御旅所の社人が駒形を扱っていたようである。

文明十九年(一四八七)の「駒大夫せんけん借用状案」によると、少将井伯(駒)大夫という人物が伯(駒)形を保管していたが、借金のために御霊社の惣一職の東女坊に質入れしていた(『八坂神社文書』一二〇五)、そののちに借金は弁済したが、伯形そのものは、毎年礼金を払ってそのまま預けていた。しかし、東女坊はこれを質流れの品だとして、応仁の乱で中断後、はじめて再興された明応九年(一五〇〇)の祇園祭で伯形をつとめた。それに対して伯形の返却を求める訴訟が起こされたという。^⑬その一連の文書のひとつ、永正元年(一五〇四)「氏名未詳折紙」(『八坂神社文書』一二一〇)には、「少将井駒方座中」と記されていることから、何か商業上の特権をもつ駒形座があり、そこから駒形神人を出し、伯(駒)大夫もその座に所属していたようである。

少将井は、京都市中京区烏丸通竹屋町下ル付近にあった井戸で、祇園の神輿の中の一基がここを御旅所としていたことから、駒形座はその御

旅所に所属する集団で、少将井の神輿に従っていたようである。

この訴訟の結果、少将井の駒頭は御霊社の巫女から返上されたようだが、駒形神人を最初に紹介した河原正彦は、この伯形が上久世の駒形稚児につながるとしている。^⑭

文献資料だけではなく、絵画資料にも駒形神人が描かれている。古くは十二世紀に描かれた『年中行事絵巻』(巻九・祇園御霊会)に、最初の神輿の後方で、馬に乗った布で覆面した人物の前に、衣冠束帯で馬に乗った人物が胸に駒形を掛けた姿で描かれている。

「洛中洛外図屏風」や「祇園祭礼図屏風」など、近世の祇園祭を描いた絵画作品の中にも、神輿の前に駒形を胸元に掛けた馬に乗った人物が描かれていることが指摘されており、サントリ―美術館所蔵「日吉山王・祇園祭礼図屏風」のように、駒形神人が同じ場面に二人登場するものもある。^⑮

これら作品から、駒形を胸元に掛けた人物が、祇園祭の神輿渡御行列に登場していたことは明らかではあるが、近世の絵画の人物が少将井の駒方神人なのか、今日につながっている上久世の駒形稚児のどちらなのか。少将井駒方神人と久世の駒形稚児のつながりも含めて史料が乏しいため、わからない。

一方の石清水八幡宮の駒形神人は、九月十五日の石清水祭で未明に男山山頂の社殿を出発し、麓の頓宮に三基の神輿が下りる渡御行列に登場する。もとは旧暦八月十五日におこなわれた放生会で、頓宮前を流れる大谷川で放生儀礼などの神事をおこなったのち、同日日没後の頓宮から山頂の社殿への還幸行列にも駒形神人は登場する。

駒形神人は七、八歳の男児がつとめる役で、身体の前後に白馬の頭部と尾のつくりものを結びつける。頭の冠に日象と月象の飾られたものが二人ずつ、計四人出るのが本来の形だが、現在は人数が少ない年もある「写真5」。

『師郷記』永享七年（一四三五）八月十五日条には、駒形神人の訴訟のため、神輿の御下りが遅くなったと記されており、このころには駒形神人がいたことがわかる。^{①⑦} 嘉永元年（一八四八）の『男山考古録』（十三、全昌寺）には、「山城國鳥羽村駒形神人等、皆當寺に屬せし事も古記ともに見えたり」とあり、駒形神人が鳥羽村（現在、京都市伏見区）から出され、頓宮付近にあった全昌寺に属していたようである。^{①⑧}

その原形としては、嘉禄二年（一二二六）年「石清水八幡宮護国寺孝靈放生会次第注進状」に「駒形舞人 左方二人右方二人」とあり、^{①⑨}「別当法印輝清注進」にも、寛元二年（一二四四）五月五日の端午御節に「次駒形四人、南庭二行列立 左右各二人」とあることから、^{②①}もともと放生会に限らず石清水八幡宮で奉納される芸能であったことがうかがえる。

現在に伝わる民俗芸能でも、このような馬のつくりものを使ったものは、長野県阿南町の新野の雪祭で、全身の馬のつくりものの胴の中途に空いた穴に足を入れ、胴部を肩に吊り下げて二人が踊る競馬^{きょうまん}があり、^{②②}東京都板橋区の赤塚諏訪神社の田遊びにも、竹を櫓形に曲げた胴体に木製の駒形を付けて麻布を吊したものを作り、その中に五月女役の男児を入れ、大人が抱えて槍に対して突きかかる所作をおこなう儀礼がある「写真6」。これらの事例も含めて河原正彦は、祇園社の駒形神人は、勅使の風流化・稚児化とともに宮廷舞楽の狛龍楽の駒形が獅子と分離して独立

して祭礼行列の風流として発展したのだと推測している。^{②③}

杭全神社の駒形神人は、この神輿渡御行列が牛頭天王の祭りであったことや、祭礼図に描かれた姿から、祇園祭の駒形神人が伝わった可能性が強い。この神人は「祭礼行列帳写」には町名の記載がないことから、各町が交代で当番町となって担当していたのではないかと思われる。^{②④}

これは、史料の末尾に記された住吉社の荒和大祇神事の神輿渡御行列に馬に乗った「児」と同様、祭りの中で重要な役割があったはずである。荒和大祇神事の児は、この史料のころには坂上七名家から交代に男児を出すようになっており、神輿の行列を途中で迎える堺奉行と、御旅所の宿院頓宮へ桔梗の造花を運んだことから花笠の稚児とよばれていた。しかし、江戸時代の初めには、アハラヤ（阿波羅耶・荒和祇家）とよばれて、祇いを象徴する人物だったようである。^{②⑤}

杭全神社の駒形神人が、祭礼行列における風流としての存在だったのか、住吉社の荒和大祇神事のアハラヤのように祭礼において重要な役割を果たす存在であったのか、また、なぜ杭全神社でも駒形稚児が出されるようになったかについては、ほかに史料がないため不明である。今後の研究にゆだねることとし、ここでは駒形稚児の事例が祇園社や石清水八幡宮以外にも存在していたことを紹介して筆をおきたい。^{②⑥}

註

- ① 杭全神社では、貞観四年（八六二）を創建の年として、式年事業をおこなっている。
- ② 『平野郷社縁起』享保三年（一七一三）（関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター『杭全神社宝物撰』二〇一〇年に収録）。
- ③ そのため、江戸時代以前の記述については熊野権現や牛頭天王社と表現しなければならないが、便宜上、近世以前の記述についても、杭全神社と記述する。
- ④ 平野区誌編集委員会編『平野区誌』『3近世平野郷の成立』（平野区誌刊行委員会、二〇〇五年）。
- ⑤ 『平野含翠堂史料』（清文堂出版、一九七三年）。
- ⑥ 目録として、『含翠堂（土橋家）文庫目録』（大阪大学附属図書館、一九七二年）が発行されており、目録番号はそれに従った。
- ⑦ 宝暦十三年（一七六三）の「摂州平野大絵図」には、長宝寺境内に「田村麿旧宅」と「田村麿堂」の記述がある。
- ⑧ 平野郷公益会編『平野郷町誌』三九八～四〇〇ページ、一九三一年。
- ⑨ 琴柱は、本来和琴などで胴の上に立てて弦を支え、その位置で音の高低を調節するものだが、二股に分かれているため、U字形の捕物道具（とつものぐさ）の刺股（さしまた）の別名として使われていた。
- ⑩ 杭全神社所蔵の「平野郷社之図」（明治初め）には、大鳥居の東側に石段で高くなった区画が描かれ、その中央に石壇とその前に狛犬が見える。「摂州平野大絵図」とは周囲の景観が変わっているが、かつての御旅所（みりょ所）の様子がわかる資料である（『杭全神社宝物撰』収録、註②参照）。
- ⑪ 『神道名目類聚抄』（佐伯有義校訂、第一書房、一九八六年）。
- ⑫ 田宮仲宣著『東瀛子』（『日本随筆大成』第一期一九、吉川弘文館、一九

九四年）。

- ⑬ 『八坂神社文書』一二〇五～一三（『八坂神社文書』上巻、第九 社人少将井狛大夫）。
- ⑭ 河原正彦「祇園祭の上久世駒形稚児について」（『文化史研究』一四、一九六二年）。
- ⑮ 八反裕太郎「京都国立博物館蔵『祇園祭礼図屏風』の史的位置」（『美術史』一五四、二〇〇二年）に、「洛中洛外図屏風」など祇園祭を描いた近世の絵画作品に描かれた駒形稚児の描写箇所を表にまとめている。
- ⑯ 河内将芳著『絵画史料が語る祇園祭』第一章「描かれた神輿渡御」（淡交社、二〇一五年）に、サントリー美術館所蔵「日吉山王・祇園祭礼図屏風」（祇園会蔵・第二扇）の駒形神人の拡大写真が載っている。
- ⑰ 『師郷記』巻二（『史料纂集』所収、続群書類従完成会）。
- ⑱ 『男山考古録』十三、全昌寺（『石清水八幡宮史料叢書』一、石清水八幡宮社務所、一九六〇年）。
- ⑲ 『宮寺縁事抄』（放生会諸禁事）嘉禄二年（一二二六）年八月十一日「石清水八幡宮護国寺孝霊放生会次第注進状」（『石清水文書之五』所収）。
- ⑳ 『石清水文書之二』六二「別当法印輝清注進」。
- ㉑ 南信州阿南町新野雪祭等資産化事業実行委員会編『新野の雪祭り』二六～一三ページ、二〇一七年。
- ㉒ 河原正彦「古代宮廷儀礼の社寺祭礼化——殊に祇園御霊会の駒形稚児をめぐって——」（『芸能史研究』七、一九六四年）。
- ㉓ 「祭礼行列帳写」には、十四日に出る「御駒形神人」に対し、六月六日の御旅所への神幸行列の方には「神馬児」と記している。しかし、どちらも行列順では同じ位置にいることから、同じ人物を表していると思われる。六日の方を「神馬児」と記しているのは、六日には、駒形を首に掛けてい

なかったことによるのかもしれない。

②④ アハラヤについては、拙稿「『土橋家文書』に記録された住吉祭の花笠の稚児」(『大阪の歴史』第八十七号、大阪市史編纂所、二〇一八年刊行予定)で紹介する。

②⑤ 土橋家文書の閲覧と掲載については、大阪大学文学部日本史研究室の許可を得ました。閲覧と掲載・翻刻について、北泊謙太郎、小林初恵、中村晶子の各氏にご協力いただきました。また、杭全神社が所蔵する「平野郷

牛頭天王祭礼図」は、関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センターが撮影した写真を使用しました。掲載を許可していただいた藤江正謹宮司に、お礼を申し上げます。

《参考文献》

『杭全神社 平野郷夏祭り』(平野郷夏祭り実行委員会しおり部会、二〇一七年)



写真1 杭全神社夏祭りの猿田彦



写真2 全興寺での神事



写真3 長宝寺での神事



写真4 京都祇園祭・上久世稚児社参



写真6 赤塚の田遊び（槍突き）



写真5 石清水祭・駒形神人

●「土橋家文書」N 69「祭礼行列帳写」延享五年（一七四八）

（大阪大学文学部日本史研究室所蔵）

〔表紙〕
「當社牛頭天皇」

御祭禮行列帳

延享五年 六月改写

羽織袴

長口長口長口
廻江廻江廻江

神輿太鼓 荷人拾人
祇園講中々出ス

黒帷子脇差

八角豎棒

同

〔貼紙下〕
〔此三人〕
〔此式人〕野堂町
當時ハ棒式本ニナル

羽織袴

市町代

西脇町代

馬場町代

同

脊戸口町代

泥堂町代

大祢宜 供壺人

黒帷子

〔貼紙下〕
〔野堂町〕
〔市町〕

同

野堂町代

〔貼紙下〕

黒帷子脇指

八角塗棒

〔貼紙〕

一丸之塗棒 式本

泥堂町

馬場町々

神輿

小祢宜

黒帷子

供壺人

〔貼紙下〕
〔右市町々〕

〔貼紙〕
〔泥堂町〕

當時式本ニナル

長口長口長口
廻江廻江廻江

神輿太鼓

黒帷子脇差

八角塗棒

〔貼紙〕
「半棒灯燈 式本」

同

右野堂町々

黒帷子脇差

供

上下
使役

同

當時壺人

同
供

右銘々々

御輿舁

四拾人

勝手ノ襦袢ニ而
床机持式人とも

此處江

使役

供壺人

袴羽織

黒帷子脇差

同

〔貼紙〕
當時八角棒式本

同

此供銘々々

〔貼紙〕
「野堂町々」

〔貼紙〕
「八角之棒式本 野堂町々」

御屋敷御同心

八角棒式本之所江
御出役惣會所役人御組之諸々

出勤

〔貼紙下〕

黒帷子脇指

琴柱持

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

池之坊 黒帷子脇差 供老人 〔貼紙下〕 〔中之坊〕 〔貼紙は白紙〕 右泥堂町合 大門坊 右流町合 供老人 同上		南之坊 同上 供老人 東之坊 同上 供老人 御櫛 大祢宜 〔貼紙下〕 〔右泥堂町合〕 〔貼紙〕 〔右市町合〕		御幣 同上 供老人 惣市 惣願 三神子 御供唐櫃 烏帽子白張 式人 但此内江御供并御三寸錫一對入 右式人野堂町合		神馬兒 烏帽子白張 添人 右馬借中合 隨身 右式人流町合 隨身 右式人野堂町合 〔貼紙〕 〔御神宝之間二八九灯笼五人流町合〕 御旗 素襖 同 同		御櫛 素襖 同 御鉾 素襖 同上 御大鉾 同上 右四人内 式人 市町合 式人 脊戸口町合	
---------------------------------------------------------------------------------------	--	-----------------------------------------------------------------------------------------	--	----------------------------------------------------------------------------------------	--	-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------	--	----------------------------------------------------------------------------------	--

<p>御弓 <small>素襖 同上</small> <small>御弓</small> <small>右式人馬場町合</small> <small>御太刀</small> <small>素襖 同上</small> <small>同</small> <small>右式人西脇町</small> <small>大御太刀</small> <small>素襖 同上</small> <small>御白杖</small> <small>右市町合</small></p>		<p>御組 <small>（貼紙）</small> <small>躍子</small> <small>（ママ）</small> <small>万 黒素襖 供老人</small> <small>地下役人 壱人</small> <small>股引脚半</small> <small>水取守役 壱人</small> <small>垣外 前後六人</small> <small>」</small></p>		<p>此八人ハ野堂町合 <small>夜に入候得者御神堂之間二遣</small> <small>躍子</small> <small>（ママ）</small> <small>万 黒素襖 供老人</small> <small>地下役人 壱人</small> <small>股引脚半</small> <small>水取守役 壱人</small> <small>垣外 前後六人</small> <small>」</small></p>		<p>此八人ハ野堂町合 <small>夜に入候得者御神堂之間二遣</small> <small>躍子</small> <small>（ママ）</small> <small>万 黒素襖 供老人</small> <small>地下役人 壱人</small> <small>股引脚半</small> <small>水取守役 壱人</small> <small>垣外 前後六人</small> <small>」</small></p>	
<p>御組 <small>（貼紙）</small> <small>躍子</small> <small>（ママ）</small> <small>万 黒素襖 供老人</small> <small>地下役人 壱人</small> <small>股引脚半</small> <small>水取守役 壱人</small> <small>垣外 前後六人</small> <small>」</small></p>		<p>御組 <small>（貼紙）</small> <small>躍子</small> <small>（ママ）</small> <small>万 黒素襖 供老人</small> <small>地下役人 壱人</small> <small>股引脚半</small> <small>水取守役 壱人</small> <small>垣外 前後六人</small> <small>」</small></p>		<p>御組 <small>（貼紙）</small> <small>躍子</small> <small>（ママ）</small> <small>万 黒素襖 供老人</small> <small>地下役人 壱人</small> <small>股引脚半</small> <small>水取守役 壱人</small> <small>垣外 前後六人</small> <small>」</small></p>		<p>御組 <small>（貼紙）</small> <small>躍子</small> <small>（ママ）</small> <small>万 黒素襖 供老人</small> <small>地下役人 壱人</small> <small>股引脚半</small> <small>水取守役 壱人</small> <small>垣外 前後六人</small> <small>」</small></p>	

<p>御幣 小祢宜 侍 惣市 惣領 三神子 御供唐櫃 式人</p> <p>上同 傘</p> <p>右三人「市町より」泥堂町」</p>	<p>御旗 素襖 色よき小サ刀</p> <p>御旗 素襖</p> <p>右式人野堂町</p> <p>右式人野堂町</p> <p>御楯 素襖 小サ刀</p> <p>同</p>	<p>帆掛帽子</p> <p>素襖 色よき小サ刀</p> <p>御旗 素襖</p> <p>右式人野堂町</p> <p>御旗 素襖</p> <p>右式人野堂町</p> <p>御楯 素襖 小サ刀</p> <p>同</p>	<p>素襖 小サ刀</p> <p>御太刀 同</p> <p>右式人西脇町</p> <p>大御太刀 同</p> <p>右野堂町</p> <p>御白杖 同</p> <p>右市町</p> <p>神馬</p>
--------------------------------------------------------------------	----------------------------------------------------------------------------------------	--------------------------------------------------------------------------------------------------------------	------------------------------------------------------------------------------------------------------

<p>黒帷子脇差 琴柱 同 琴柱 右式人馬場町 右当時者相止</p>	<p>御役所御組 式人 棒持式人 纏持式人 垣外之者式人</p>	<p>前後纏挑灯持 (貼紙下) 〔六人惣会所〕 (貼紙) 〔四人惣会所 七人七町〕</p>	<p>御神輿 神輿昇 床机持式人共 七町丁代</p>	<p>黒帷子脇差 八角棒 同 半棒灯燈 带刀踏込 惣代 垣外式人</p>	<p>同 同 惣代 垣外式人</p>	<p>寄棒 今林村 役人 寄棒 新在家村 役人 寄棒 今在家村 役人</p>	<p>寄棒 中野村 役人 寄棒 馬場町 役人 寄棒 泥堂町 役人</p>	<p>寄棒 西脇町 役人 寄棒 脊戸口町 役人 寄棒 市町 役人</p>
--------------------------------------------------------	----------------------------------------------	-----------------------------------------------------------	----------------------------------------	--------------------------------------------------------------	--------------------------------	------------------------------------------------------------	----------------------------------------------------------	----------------------------------------------------------

	寄棒	流町 役人	寄棒	野堂町 役人	寄棒	同断
(貼紙)	「此所へ高張灯燈」 八角棒 半棒灯燈	同	塗金棒 傍使 <small>上下大小</small>	塗金棒 <small>上下大小</small> 傍使	惣年寄中 <small>神職</small>	
同	同	同	同	同		
當時塗金棒式人ニナル						
(貼紙下)	琴柱	野堂町合	同	背戸口町合		
上下脇差	流町合	同断	同	西脇町合	(以下読めず)	
惣代仮役	同断	同断	同断			
同	市町合	同断				
同	背戸口町合	同断				
(貼紙)	「上下脇差」 琴柱	同	高張灯燈	八角棒	半持灯燈	
惣代仮役	同	同	同	同		
垣外式人	同	同	同	同		
同	同	同	同	同		
黒帷子脇差	見豫	物年寄	惣代仮役	琴柱	垣外	
金棒	同	同	同	同	式人	
同	同	同	同	同		

松明持式人	廿枚
ことち持式人	廿枚
池之坊傘持忝人	十枚
同 侍忝人	十四枚
御屋敷付式人	廿枚
寛政五年七町願ニ付	
四枚之処五枚	八枚之所拾枚
見世札式枚宛増遣ス	
神役人足江ハ木札相渡シ	
置申候	
(以下二〇枚白紙)	
地下台三十歩迄行列	
神前献上花 見腰ニサス	筈

口取	口取
同 断	脇黒帷子
介副	介副
同 断	小烏布サ帽子衣
胡床持	履持
但シ二役兼ル	忝人
脇烏白帽子張	
先手	供
帶上	脇黒帷子
警固	警固
同 断	大素烏帽子小襖子
兄馬	

琴柱持忝人	五枚
御屋敷付式人	十四枚
十四日	
散錢取	
御大刀持式人	廿枚
琴柱持三人	三十枚
御屋敷付三人	三十枚
泥堂町	
御輿洗	
丸棒持忝人	五枚
称宜供忝人	五枚
同御旅所江出御之時	
御さしハ持式人	拾枚
ことち持三人	十五枚
称宜供忝人	五枚
御屋敷付式人	十四枚
十四日	
御さしハ持式人	廿枚
称宜侍忝人	十四枚
同 笠持忝人	拾枚
同 供忝人	拾枚
ことち持三人	三十枚
御屋敷付式人	廿枚
馬場町	
御輿洗	
丸棒持忝人	五枚
同御旅所江出御之時	
池之坊供忝人	五枚
御弓持式人	拾枚
松明持式人	十枚
ことち持三人	十五枚
御屋敷付式人	十四枚
十四日	
御弓式人	廿枚

同御旅所江出御之時	
御鉾持式人	十枚
琴柱式人	廿枚
御屋敷付三人	三十枚
同十四日	
池之坊供忝人	拾枚
御鉾持忝人	廿枚
散錢取	
御白杖持忝人	拾枚
長柄鑓持式人	廿六枚
たち持忝人	拾枚
大称宜侍忝人	十四枚
同 笠持忝人	十枚
同 供忝人	十枚
御屋敷付三人	三十枚
脊戸口町	
御輿洗	
琴柱持忝人	五枚
同御旅所江出御之時	
南之坊供忝人	五枚
御鉾持式人	拾枚
琴柱持忝人	五枚
御屋敷付三人	廿一枚
同十四日	
御鉾持式人	式十枚
南之坊傘持忝人	十枚
同 とも忝人	十枚
散錢取	
長柄鑓持三人	三十九枚
琴柱式人	廿枚
御屋敷付三人	三十枚
西脇町	
御輿洗	
琴柱忝人	五枚
同御旅所江出御之時	
御大刀持式人	五枚

<p>「土橋七郎兵衛控」</p> <p>(素表紙)</p>	<p>笠籠持 挟箱持 笠籠持</p> <p>黒帷子 差</p> <p>還御之時廻廊ヨリ本社迄</p> <p>一立提燈</p> <p>一棒つき</p> <p>一箱ちやうちん</p> <p>一先手</p> <p>一同供 壹人</p> <p>一箱ちやうちん 貳人</p> <p>一布衣 貳人</p> <p>一祢宜</p> <p>一素襖 貳人</p> <p>一白張祓机 貳人</p> <p>こもひてろき</p> <p>一立ちやうちん 壹人</p> <p>一捍</p> <p>一供 壹人</p> <p>メ</p>	<p>供</p> <p>黒帷子 脇差</p> <p>捍供 捍供 捍供</p> <p>黒帷子 脇差</p> <p>是迄者本社出仕行列也 但馬武定・茶弁當・ 挟箱・笠籠・赤籠持・ 此分者松陰ニ捍居申 咎神前江ハ参り不由候 神前江出仕仕舞候 ハ不本行列也</p> <p>茶弁當</p> <p>黒帷子 脇差</p> <p>松陰ヨリ宿院迄行列</p>	<p>称宜</p> <p>馬副</p> <p>素帶 鳥帽子 襖</p> <p>馬副</p> <p>胡床持</p> <p>傘持</p> <p>鳥帽子 素張</p> <p>介人</p> <p>鳥帽子 素張</p> <p>萩膝付</p> <p>祓机祓箱</p> <p>捍</p> <p>帶 下刀</p>
-------------------------------	-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

牛頭天王祭礼図

牛頭天王祭礼図

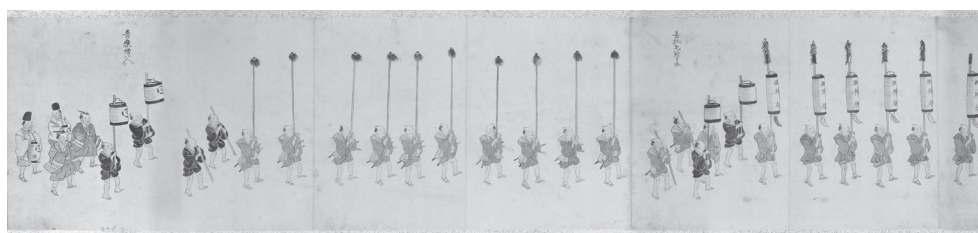


甲戌春寿
丹厓書
(上田丹厓)

猿田彦明神

神輿太鼓
前後祇園講付
子供四人
昇夫十八人

(貼紙)
此先二綿屋中
挑燈十本有
総屋仲間 挑燈十本



長柄毛槍 十本

音楽僧 八人



音楽方
中瀬氏
三上氏
名代

神宮寺中僧 四人
先年 壺人
(貼紙)
是所江
屯羅加入



別當 東之坊

祢宜 貳人
神子 三人

御供唐櫃



兒馬上
牛頭ヲ持

御神室
随人 貳人

御旗 貳人

御楯 貳人

御鉦 貳人

大御鉦 貳人



御弓 弍人

御太刀 弍人

大御太刀
御白杖

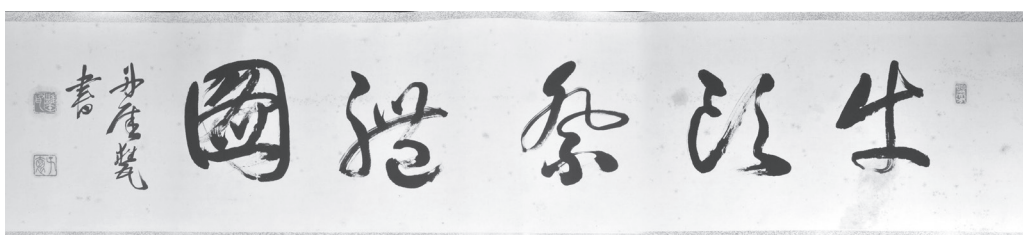
御神馬
御翳 弍人

松明 四人

白張 八人

(貼紙)
是所江
神子加入

賽銭箱 弍人
(貼紙)
是所江
是所江祠掌馬上三而
加入



「平野郷牛頭天王祭礼図」(巻物)(下巻)

牛頭祭礼図

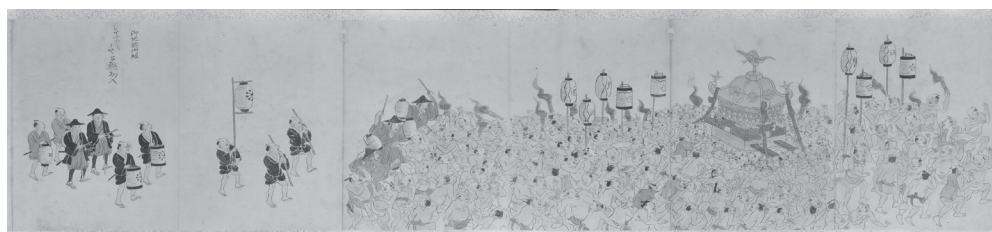
丹厓甕
書



使役

(貼紙)
御地頭御組
「是所江
屯羅」

神輿 舁夫四十人
床几持 弍人
惣会所總竿棒丁燈 四本
七町マトヒ燈 七本
同丁代制度二先



御地頭御組
(貼紙)
「是所江
屯羅加入」



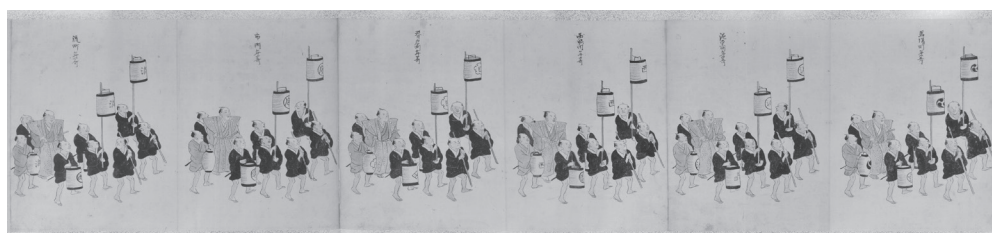
惣代

今林村年寄

新在家村年寄

今在家村年寄

中野村年寄



馬場町年寄

泥堂町年寄

西脇町年寄

脊戸口村年寄

市町年寄

流町年寄



野堂町年寄

惣会所列之

出勤婦之砌

竿棒四本此所二入

傍使役四人

神職惣年寄

兩人

但シ年により老入ノ
事モ在之候

突棒 八本

惣代仮役



見豫惣年寄

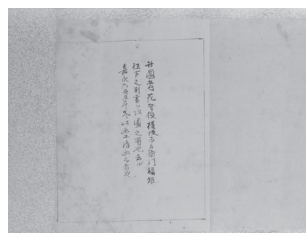
兩人

惣代仮役

御地頭
地方御役人



駒形神人の部分（拡大）



此圖者花守役榎坂市右衛門福姫
往古之列書ヲ以圖之所也 去ル
嘉永六癸丑年冬以画工清画之者也